
中村秀之 | 業績一覧

1 | 単著

『暁のアーカイヴ——戦後日本映画の歴史的経験』東京大学出版会、2019年7月、総頁390。

『特攻隊映画の系譜学——敗戦日本の哀悼劇』（戦争の経験を問う）岩波書店、2017年3月、総頁312。

『敗者の身ぶり——ポスト占領期の日本映画』岩波書店、2014年10月、総頁341。

『瓦礫の天使たち——ベンヤミンから〈映画〉の見果てぬ夢へ』せりか書房、2010年6月、総頁263。

『映像／言説の文化社会学——フィルム・ノワールとモダニティ』（現代社会学選書）岩波書店、2003年3月、総頁304。

2 | 監修

『戦後映倫関係資料集』（全10巻、別巻1巻）クレス出版、2019年7月～2021年3月。

3 | 共編著

井川充雄、石川巧、中村秀之（編）『〈ヤミ市〉文化論』ひつじ書房、2017年2月。

木村建哉、中村秀之、藤井仁子（編）『甦る相米慎二』インスクリプト、2011年9月。

長谷正人、中村秀之（編著）『映画の政治学』青弓社、2003年9月。

4 | 共訳書

中村秀之、河野真理江（共訳）、ジョン・マーサー、マーティン・シングラー（著）『メロドラマ映画を学ぶ——ジャンル・スタイル・感性』フィルムアート社、2013年12月。

長谷正人、中村秀之（編訳）、トム・ガニング他（著）『アンチ・スペクタクル——沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会、2003年6月。

5 | 分担執筆

「ジル・ドゥルーズ——哲学者は映画作家をどう論じたか」堀潤之、木原圭翔編『映画論の冒険者たち』（仮）東京大学出版会、刊行予定。

"Beyond Mt. Fuji and the Lenin Cap: Identity Crisis in Taniguchi Senkichi's *Akasen kichi* (*The Red Light Military Base*, 1953)," translated by Shota T. Ogawa and Bianca Briciu, in *Routledge Handbook of Japanese Cinema*, edited by Joanne Bernardi and Shota T. Ogawa, London: Routledge, August, 2020, pp. 31–50.

「〈不活動〉との協働——土本典昭『水俣の子は生きている』（1965年）」丹羽美之、吉見俊哉編『戦後史の切断面——公害・若者たちの叛乱・大阪万博』（記録映画アーカイブ3）東京大学出版会、2018年7月、39–57頁。

「映画に社会が現れるとき——『ステラ・ダラス』（1937）の言語ゲーム」若林幹夫、立岩真也、佐藤俊樹編『社会が現れるとき』東京大学出版会、2018年4月、325–359頁。

「敗戦後日本のヘテロトピア——映画の中のヤミ市をめぐる」井川充雄、石川巧、中村秀之編『〈ヤミ市〉文化論』ひつじ書房、2017年2月、108–133頁。

「黒澤明——アメリカとの出会いそこない」栗原彬、吉見俊哉編『敗戦と占領』（「ひとびとの精神史」第1巻 1940年代）岩波書店、2015年7月、149–174頁。

「見えるものから見えないものへ——『社会科教材映画大系』と『はえのいない町』（1950年）の映像論」丹羽美之、吉見俊哉編『戦後復興から高度成長へ——民主主義・東京オリンピック・原子力発電』（記録映画アーカイブ2）東京大学出版会、2014年7月、61–98頁。

「喜劇の到来——森崎東のレジスタンスをめぐる覚書」藤井仁子編『森崎東党宣言！』インスクリプト、2013年11月、161–177頁。

「이등병을 표상하는」(二等兵を表象する) 吉見俊哉、등저編『냉전 체제와 자본의 문화 (근대 일본의 문화사-09)』（冷戦体制と資本の文化 [近代日本の文化史 9]）소명출판（ソミョン出版）、2013年5月、159–191頁。翻訳：허보윤（ホ・ボユン）

「原水爆、家長、嫁——『生きものの記録』（1955年）における「私」の自壊」ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編『戦後』日本映画論——一九五〇年代を読む』青弓社、2012年10月、99–120頁。

「敗者による敗者のための映像——CIE映画教育と日本製CIE映画について」土屋由香、吉見俊哉編『占領する眼・占領する声——CIE／USIS映画とVOAラジオ』東京大学出版会、2012年7月、243–263頁。

「暁にあうまで——「岩波映画」と〈眼〉の社会的創造」丹羽美之、吉見俊哉編『岩波映画の1億フレーム』（記録映画アーカイブ1）東京大学出版会、2012年5月、39–57頁。

「生命の切れ端——相米映画における下半身の想像力」木村建哉、中村秀之、藤井仁子編『甦る相米慎二』インスクリプト、2011年9月、132–158頁。

「1953–D年、日本——「立体映画」言説と映画観客」藤木秀朗編『観客へのアプローチ』（日本映画史叢書⑭）森話社、2011年3月、59–86頁。

「水俣の声と顔——土本典昭『水俣——患者さんとその世界』について」黒沢清、四方田犬彦、吉見俊哉、李鳳宇編『踏み越えるドキュメンタリー』（日本映画は生きている・第7巻）岩波書店、2010年12月、13-35頁。

「富士山とレーニン帽——映画「赤線基地」(1953年)と「反米」』『イメージとしての戦後』坪井秀人、藤木秀朗編、青弓社、2010年3月、179-205頁。

「アウラの凋落——W・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」(1936)」井上俊、伊藤公雄編『文化の社会学』（社会学ベーシックス3）世界思想社、2009年7月、199-208頁。

「花摘む人に倣って——映画とベンヤミン（もう一度、あるいは）」『ベンヤミン——救済とアクチュアリティ』（KAWADE道の手帖）河出書房新社、2009年6月、176-179頁。

「メディアの系譜学」、「ヴァルター・ベンヤミン」、「ジル・ドゥルーズ」伊藤守編『よくわかるメディア・スタディーズ』ミネルヴァ書房、2009年3月、24-27、196-197、210-211頁。

「シネマの身体——三つのたとえ話」立教大学映像身体学科編『映像と身体——新しいアレンジメントに向けて』、せりか書房、2008年10月、138-172頁。

「「紀子」の首——『晩春』の無気味さについて」一柳廣孝、吉田司雄編『映画の恐怖』（ナイトメア叢書④）、青弓社、2007年5月、51-55頁。

「영화 속의 도쿄」(映画のなかの東京) 吉見俊哉、若林幹夫編『도쿄 스테디즈』(東京スタディーズ) 커뮤니케이션북스(コミュニケーションブックス)、2006年10月、175-182頁。翻訳：오석철(オ・ソクチョ)

「特攻隊表象論」倉沢愛子、杉原達、成田龍一、テッサ・モーリス-スズキ、油井大郎、吉田裕編『戦場の諸相』（岩波講座 アジア・太平洋戦争5）岩波書店、2006年3月、301-330頁。

「映画のなかの東京」吉見俊哉、若林幹夫編『東京スタディーズ』紀伊國屋書店、2005年4月、166-173頁。

「ハリウッド作家動員(HWM)と映画言説の転換——序説——『芸術・芸能の社会的基盤』(桃山学院大学総合研究所・研究叢書20) 桃山学院大学総合研究所、2005年3月、53-77頁。

「ハリウッド映画へのニュースの侵入——『スミス都へ行く』と『市民ケーン』におけるメディアとメロドラマ」長谷正人、中村秀之編『映画の政治学』青弓社、2003年9月、121-170頁。

「クイズと審問——50年代アメリカのクイズ・スキャンダルについて」石田佐恵子、小川博司編『クイズ文化の社会学』世界思想社、2003年3月、47-74頁。

「〈二等兵〉を表象する——高度成長初期のポピュラー文化における戦争と戦後」小森陽一、酒井直樹、島園進、千野香織、成田龍一、吉見俊哉編『冷戦体制と資本の文化 1955年以後1』（岩波講座 近代日本の文化史9）岩波書店、2002年12月、133-168頁。

「イメージ(知覚)の様式と社会の様式はどのように関係しているのか？」大澤真幸編『社会学の知33』現代書館、2000年4月、58-63頁。

「フィルム・ノワール/ディスクール・ノワール——国民映画と芸術性 1938~1949年」吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』せりか書房、2000年4月、140-155頁。

「飛び散った瓦礫のなかを——「複製技術時代の芸術作品」再考」内田隆三編『イメージのなかの社

会』(情報社会の文化2) 東京大学出版会、1998年3月、183-225頁。

「映像の野生を解き放つ——イメージの言説／言説の不安」太田省一編『分析・現代社会——制度／身体／物語』八千代出版、1997年6月、245-275頁。

6 | 論文

「アンドレ・バザンの« présence »について」『アンドレ・バザン研究』2、2018年3月、68-79頁。

「『市民ケーン』のガラス球——パストラル・モードによる階級表象」『立教映像身体学研究』6、2018年3月、45-64頁。

「ヒッチコック的3D——『裏窓』(1954)と『めまい』(1958)における接触と情動」『立教映像身体学研究』4、2016年3月、83-102頁。

「ゆく者を送るまなざし——高峰秀子と〈顔〉の時間」『ユリイカ』47(6)、2015年4月、117-124頁。

「映画の全体と無限——ドゥルーズ『シネマ』とリュミエール映画」『立教映像身体学研究』3、2015年3月、52-72頁。

「高倉健と特攻隊映画——東映任侠映画の時期における」『ユリイカ』47(2)、2015年2月、125-132頁。

「『裏窓』再訪——その再帰的な観客性の批判に向けて」『立教映像身体学研究』1、2013年3月、5-24頁。

“Ozu, or On the Gesture,” translated by Kendall Heizman, *Review of Japanese Culture and Society* XXII (December 2010), pp. 144-160.

「『フィルム・ノワール』の名において?——映像／言説・再考」『季刊 iichiko』102、2009年4月、69-79頁。

「『ある機関助士』、あるいは皮膚のエチカ」『映画芸術』58(4)、2008年10月、26-27頁。

「漂い出る声たちの交響——『水俣——患者さんとその世界』論3」『未来』495、2007年12月、36-41頁。

「非同期の力——『水俣——患者さんとその世界』論2」『未来』494、2007年11月、26-31頁。

「奈落から立ち上がる声——『水俣——患者さんとその世界』論1」『未来』493、2007年10月、34-39頁。

「放心する獣たちの遭遇——『A Bao A Qu』の冒険」『テアトル・オブリーク』2007年9月(*現在アクセス不可)。

「儀礼としての特攻映画——『男たちの大和／YAMATO』の場合」『季刊 前夜』第1期7号、2006年4月、134-137頁。

「ポスト占領期黒澤明論」『思想』980、2005年11月、144-164頁。

「少数報告（マイノリティ・リポート）は存在するか——フィルム・ノワールと（反）アメリカ的なものの現在」『現代思想』31(8)、2003年6月、76-93頁。

「占領下米国教育映画についての覚書——『映画教室』誌にみるナトコ（映写機）とCIE映画の受容について」『CineMagaziNet!』6、2002年9月（<http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/CMN6/default.htm>）。

「ハリウッド映画へのニュースの侵入——『スミス都へ行く』と『市民ケーン』のメディア論」『社会学年誌』43、2002年3月、23-40頁。

「ポスト=ノワール・コンフィデンシャル」『ユリイカ』32(16)、2000年12月、134-142頁。

「オン・ザ・ロード／オフ・ザ・ロード——ヴィム・ヴェンダースの旅する身体」『国際交流』23(1)（通号89）、2000年10月、36-40頁。

「映画批評と映画の社会学」『學燈』97(5)、2000年5月、16-19頁。

「路上の馬鹿息子——機械の言説そして／または機械状のイメージ」『10+1』16、1999年3月、20-29頁。

「群衆のなかの道化——『群衆』（1928）における言説とアレゴリー（承前）」『10+1』15、1998年12月、22-29頁。

「群衆のなかの道化——『群衆』（1928）における言説とアレゴリー」『10+1』14、1998年8月、27-39頁。

「逃げ去る都市——遊歩の凋落と映画の出現」『10+1』13、1998年4月、33-44頁。

「外傷の絵／贈与の物語——北野武の映画についての覚書」『ユリイカ』30(3)、1998年2月、61-71頁。

「サイレント・コメディにおける〈異空間〉の生産——浮浪者のユートピアとその運命」『10+1』11、1997年10月、138-150頁。

「ヴァルター・ベンヤミンの知覚の政治学——アレゴリーの装置としての映画」『現代思想』24(3)、1996年3月、168-187頁。

「パノプティコンの原光景——視覚的無意識と近代性について」『相関社会科学』5、1996年3月、49-68頁。

「フィクションのリアリティとは何か——小説における言説と幻想」『ソシオロギス』18、1994年10月、184-202頁。

「恐怖のトポス——近代イギリスにおける狂気・表象・権力」『ソシオロギス』17、1993年8月、140-155頁。

「精神医療の誕生——知識社会学的試論」東京大学大学院社会学研究科Aコース修士論文、1990年3月、総頁203。

7 | 解説・事典項目・翻訳等

「解説——旧映倫・序説」『戦後映倫関係資料集』別冊、クレス出版、2021年3月、3–62頁。

「3D映画——過去と現在」美学会編『美学の事典』丸善、2020年12月、444–445頁。

「作家の死と観客の死、そして作品の死後の生——『暁のアーカイヴ』刊行に寄せて」『UP』48(10)、東京大学出版会、2019年10月、7–12頁。

「ブックガイド——中村秀之『特攻隊映画の系譜学——敗戦日本の哀悼劇』」『表象』12、表象文化論学会、2018年3月、285頁。

「プロが選ぶ新入生の見るべき映画4選 初期トーキーで開かれる知覚」『東京大学新聞』東京大学新聞社、2017年4月、7頁。

「ブックガイド——中村秀之『敗者の身ぶり——ポスト占領期の日本映画』」『表象』10、表象文化論学会、2016年3月、304頁。

「ヤミ市映画。空想の映画祭のために。」『東京人』30(11)、都市出版、2015年9月、88–91頁。

「映画」大澤真幸、吉見俊哉、鷲田清一編『現代社会学事典』弘文堂、2012年12月、99頁。

「DOCUMENTARY FILM 30」石井光太責任編集『ノンフィクション新世紀』、河出書房新社、2012年8月、120–121頁。

「光のなかの闇のなかの光」『第4回恵比寿映像祭 映像のフィジカル』（カタログ）、2012年2月、30–37頁。

「わたしの大地」について」山形国際ドキュメンタリー映画祭2011サブカタログ解説、2011年10月。

「映画」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善、2010年6月、478–479頁。

「山形国際ドキュメンタリー映画祭2009 プレイバック④ 好企画のナトコ特集」『山形新聞』山形新聞社、2009年10月、7頁。

「日の丸の少年たちを救出する——「いとしき子らのために」（1950）について」『山形国際ドキュメンタリー映画祭2009 やまがたと映画』山形国際ドキュメンタリー映画祭、2009年10月、23頁。

「CIE映画についてのノート」『NFCニューズレター』84、東京国立近代美術館フィルムセンター、2009年4月、10–12頁。

「ベンヤミン 近代性に取り憑いた非＝近代の思想」『シリーズStart Line 2: 子犬に語る社会学』洋泉社、2005年1月、138–139頁。

「アウラ」、「ニッケルオデオン」、「ヌーヴェル・ヴァーグ」、「ハリウッド映画」、「B級映画」、「フィルム・ノワール」、「プロダクション・コード」、「モンタージュ」北川高嗣、西垣通、吉見俊哉、須藤修、浜田純一、米本昌平編『情報学事典』弘文堂、2002年6月、8、690–691、703、753、766、827、942–943頁。

「戦争映画と身体毀損の論理」（映画の社会哲学・7）『ロゴスドン』49、ヌース出版、2002年3月、

77-79頁。

(翻訳)「イメージ」(アビゲイル・ソロモン＝ゴドー著)、「映画理論」(リンダ・ウィリアムズ著)、「仮装」(エミリー・アプター著)、「写真」(アビゲイル・ソロモン＝ゴドー著)、「窃視症／露出症／眼差し」(エリザベス・グロス著)、「フェミニズム映画」(ジョ＝アン・ウォーレス著)、「無気味なもの」(ダイアン・キシホルム著) エリザベス・ライト編、岡崎宏樹、櫻村愛子、中野昌宏他訳『フェミニズムと精神分析事典』多賀出版、2002年1月、16-19、29-34、62-64、140-144、227-230、326-330、338-343頁。

「映画における身体毀損」(映画の社会哲学・6)『ロゴスドン』48号、ヌース出版、2002年1月、60-61頁

「二つのトランプ遊び」(映画の社会哲学・5)『ロゴスドン』47号、ヌース出版、2001年11月、60-61頁。

「重力の幽霊」(映画の社会哲学・4)『ロゴスドン』46号、ヌース出版、2001年9月、60-61頁。

「あなたが見ているこの死体…」(映画の社会哲学・3)『ロゴスドン』45号、ヌース出版、2001年7月、60-61頁。

「写真は写真である？」(映画の社会哲学・2)『ロゴスドン』44号、ヌース出版、2001年5月、60-61頁。

「映画がコミュニケーションでないのは、それが創造だからである」(映画の社会哲学・1)『ロゴスドン』43号、ヌース出版、2001年3月、60-61頁。

「世界は美しい、あの世から見に来なくなるほど…(そして／しかし?) 人生はつづく」『アンデレクロス』85号、桃山学院大学、1998年7月、36-37頁。

「テレビ的世界の外へ(世の中探見 日本映画はよみがえるか②)」、『毎日新聞』、毎日新聞社、1998年3月13日夕刊。

「ベラ・バラージュ『視覚的人間』」見田宗介、上野千鶴子、内田隆三、佐藤健二、吉見俊哉、大澤真幸編『社会学文献事典』弘文堂、1998年2月、482頁。

(翻訳)「精神分析と物語」(D.Rudelic-Fernandez 著) P.コフマン編、佐々木孝次監訳『フロイト＆ラカン事典』弘文堂、1997年11月、571-574頁。

(文献紹介)「マーシャル・マクルーハン『メディア論』」『Inter Communication』17、NTT出版、1996年7月、133頁。

(翻訳) アリーン・ウィンダーマン「複数の世界がぶつかる所——LAについての考察」『10+1』4、1995年11月、134-149頁。

8 | 書評

「〈無国籍者〉の映画論——御園生涼子『映画の声——戦後日本映画と私たち』書評」『表象』11、2017年3月、301-304頁。

「レビュー アンドレ・バザン著、堀潤之訳『オーソン・ウェルズ』」『映像学』97、2017年1月、

96–100頁。

「書評 ワダ・ミツヨ・マルシアーノ『ニッポン・モダン 日本映画1920・30年代』」『図書新聞』2923、2009年6月27日、5頁。

「書評 福間良明著『殉国と反逆——「特攻」の語りの戦後史』」『社会学評論』59(1)(通号233)、2008年6月、249–251頁。

「レビュー コリン・マッケイブ著、堀潤之訳『ゴダール伝』」『映像学』80、2008年5月、53–56頁。

「Book Review『殉国と反逆——「特攻」の語りの戦後史』福間良明」『論座』2008年3月号、2008年2月、316–317頁。

「レビュー 岩本憲児編『日本映画とナショナリズム 1931–1945』（日本映画史叢書①）、『映画と大東亜共栄圏』（日本映画史叢書②）、森話社、2004年」『映像学』74、2005年5月、141–146頁。

「ブック・レビュー 長谷川一著『出版と知のメディア論——エディターシップの歴史と再生』みすず書房、2003年」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』69、2005年3月、227–228頁。

「書評 長谷正人『映像という神秘と快楽』以文社、2000年」『ソシオロジ』47(1)、2002年5月、170–175頁。

「書評 スーザン・レイ編、加藤幹郎・藤井仁子訳『私は邪魔された——ニコラス・レイ映画講義録』みすず書房、2001年」『学燈』99(5)、2002年5月、42–45頁。

「書評 松浦寿輝『表象と倒錯』筑摩書房、2001年」『Inter Communication』38、2001年10月、156–157頁。

「書評 加藤幹郎『映画とはなにか』みすず書房、2001年」『映像学』66、2001年5月、137–142頁。

「書評 A. Horton; S. Y. McDougal(eds.) *Play It Again, Sam: Retakes on Remakes*」『学燈』96(5)、1999年5月、54–55頁。

「西洋の視覚にもたらされた決定的切斷（書評 ジョナサン・クレーリー著、遠藤知巳訳『観察者の系譜』十月社）」『Inter Communication』24、1998年2月、110–111頁。

9 | 口頭発表、講演、公開講座（表題、会議名称、主催、開催場所、発表年月日）

「パストラルとメロドラマ——ハリウッド映画の表象モードを再考する」（招待）、北海道大学映像・現代文化論学会創立大会、北海道大学大学院文学研究科映像・表現文化論講座、北海道大学、2017年11月11日。

「映画はワンダー！～いつもと違う映画の見方～」（招待）、としまコミュニティ大学・一般公開講座、としまコミュニティ大学、立教大学池袋キャンパス、2017年11月4日。

「映画のペーパーチェイス——2003年、LAでの「特別資料」調査」（招待）、第12回映画の復元と保存に関するワークショップ 特別企画「映画資料カンファレンス」、映画保存協会、電気通信大学、2017年8月26日。

『『市民ケーン』(1941)における階級表象とその歪曲——W・エンブソンの「牧歌」論を手がかりとして』(事前審査有)、日本映像学会第43回大会、日本映像学会、神戸大学、2017年6月4日。

「1950年代日本の映画批評と映画界——変化、連続、亀裂」、国際日本文化研究センター共同研究「昭和戦後期における日本映画史の再構築」、国際日本文化研究センター、国際日本文化研究センター、2015年2月1日。

「ヒッチコックの3D——『裏窓』における恐怖と悦楽の彼岸」、公開講演会「ヒッチコック映画の空間と精神——ロメール&シャブロー『ヒッチコック』をうけて」(文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の基盤形成」チーム3新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究)、立教大学心理芸術人文学研究所、立教大学新座キャンパス、2015年1月10日。

「リュミエールなきシネマ——ドゥルーズ『シネマ』におけるショット概念の批判的考察」(事前審査有)、日本映像学会第40回大会、日本映像学会、沖縄県立芸術大学、2014年6月8日。

「ドゥルーズは『シネマ』で何をやったのか?——映画的思考の思惟学(ノオロジー)について」日本映像学会東部支部・映像理論研究会、日本映像学会、成城大学、2014年5月17日。

「歴史の関を越える——『虎の尾を踏む男達』(1945/1952)の神話・事実・寓意」、日本映像学会東部支部・映像テキスト分析研究会、日本映像学会、立教大学池袋キャンパス、2014年4月12日。

「原水爆/家長/嫁——『生きものの記録』(1955)における「私」の自壊」、シンポジウム「1950年代日本映画における戦前・戦中との連続性・非連続性」、国際日本文化研究センター、国際日本文化研究センター、2011年7月31日。

「社会科教材映画大系と「はえのいない町」」、記録映画アーカイブ・プロジェクト第5回ワークショップ「社会科映画と日本の民主化～発見された常総市コレクション」、記録映画アーカイブ・プロジェクト、東京大学本郷キャンパス、2011年3月6日。

「1953-D年、日本——「立体映画」言説と映画観客」(招待)、表象文化論学会第5回研究集会シンポジウム「映像・深さ・身体——3Dの系譜」、表象文化論学会、東京大学駒場キャンパス、2010年11月13日。

「『ある機関助士』と土本典昭の初期作品」(招待)、東京国立近代美術館フィルムセンター展示「ドキュメンタリー作家 土本典昭」、東京国立近代美術館フィルムセンター、東京国立近代美術館フィルムセンター、2009年8月1日。

「〈眼〉の社会的創造に向けて——「岩波映画」の誕生」、シンポジウム「岩波映画の1億フレーム」、東京大学大学院情報学環・東京藝術大学大学院映像研究科、東京大学本郷キャンパス、2009年2月14日。

「〈良き日本人〉の条件——*Behind the Rising Sun* (1943, RKO)における占領のユートピア」、日本映像学会第7回映像テキスト分析研究会、日本映像学会、早稲田大学戸山キャンパス、2007年9月29日。

“Ozu, or On the Gesture” (Keynote address) (招待), Kinema Club VII: Regimen, Revival and Recent Japanese Cinema, Kinema Club, Yale University, March 24, 2006.

「戦時期の特攻隊表象」、キネマ倶楽部第5回大会、Kinema Club、アテネ・フランス(東京)、2005

年6月24日。

「映画『二等兵物語』の“戦争の記憶”」(招待)、一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究「視覚表象と文化的記憶」(2002～2004)例会、一橋大学大学院社会学研究科、一橋大学、2004年11月13日。

「〈20世紀の首都ハリウッド〉をふりかえる——第二次世界大戦下の夢工場と亡命作家たち」(招待)、公開講座フェスタ2001・阪神奈大学生涯学習ネット、阪神奈大学生涯学習ネット、大阪府立文化情報センター、2001年11月16日。

「ハリウッド映画のなかの“暗い”アメリカ——フィルム・ノワールを紹介する」(招待)、国際理解講座「地球NOW2001 アメリカ物語」、京都府国際センター、京都府国際センター、2001年9月9日。

「スクリーン・ウォーズ——ハリウッド製〈戦争映画〉における暴力表現の歴史」(招待)、愛知大学国際コミュニケーション学会 第3回宗教と思想研究会、愛知大学国際コミュニケーション学会、愛知大学、2001年6月11日。

「映画祭の時代」(招待)、桃山学院大学キリスト教センター、桃山学院大学、1997年12月。

「映画のなかの未来都市」(招待)、聖学院大学、1997年6月。

「視覚メディアにおけるイメージ・物語・リアリティ——ベンヤミンの〈アウラ〉概念と現代の映画観客論」、日本社会学会第68回大会、日本社会学会、東京都立大学、1995年9月23日。

「近代イギリスにおける精神病院の表象について」、日本社会学会第65回大会、日本社会学会、九州大学、1992年11月1日。